



Title	ヴァジュラ(Vajra/金剛杵)の形態についての考察 : 日本のかたち, アジアのかたち
Author(s)	鳥越, 和美
Citation	デザイン理論. 2003, 43, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53098
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヴァジュラ (Vajra/金剛杵) の形態についての考察

— 日本のかたち, アジアのかたち —

鳥越和美

サンスクリット語でヴァジュラ (Vajra) は雷霆, 雷電の意味があり, 中国で「跋折羅」と音写され, 後に「金剛杵」と漢訳された。金剛杵には独鈷杵, 三鈷杵, 五鈷杵という呼称もあり, 鈷とは仏教用語で「インド古代の武器, 護身用の武器」を示す。一般的に金剛杵はインドの古代の武器が祖型であると理解されている。

本稿では漢字を使う文化圏のものを金剛杵, インドや西域, その他のアジアのものをヴァジュラと呼ぶこととする。日本の金剛杵は, 密教の法具や修験道行者の持ち物として, 仏像の帝釈天像, 金剛力士像 (仁王像) などの持物 (神のはたらきを象徴する Attribute) として, 曼荼羅の中にも諸尊の持物や三昧耶形として描かれる。ヴァジュラはアジアの国々でも見られるが, 形態は地域や文化により様々で, その伝播と表現様式の多様さをわれわれに示している。

ヴァジュラはヴェーダ時代に歴史上初めて文献に現れ, 『リグ・ヴェーダ』に「無尽蔵の武器」「稲妻」として巨大な破壊のエネルギーが讃えられる。それは天帝インドラの武器で, 技工神が聖仙の骨から作ったとされ, 旱魃を起こす悪龍を全滅させる。パーリー語の文献で, ヒラ (ダイヤモンド) はヴァジュラと同義語で, その漢訳が「金剛」とされた。

他のアジアの国々でも雷神の姿に, 古代人が天空神を恐れ敬い, 雨を乞い, 豊穡を祈願する儀礼や祈りを捧げたことを知る。ヒッタイト, バビロニア, アッシリアの雷神は, 轟音と破壊力を象徴するハンマーや斧と稲光りの束を手に行っていると考えられた。中国では

漢代画像石の雷帝は, 馬車に乗り槌でドラを打ち, 風神と稲光りの矢を放つ従者と共に描かれ, 敦煌の天井画には, 有翼の鬼神の姿で連太鼓を背負う雷神が描かれている。日本では連太鼓と鉄亜鈴型の桴を握る姿である。

インド北部のヴァジュラを分類し, 年代順に並べると〈メダリオン式〉〈サンチー式〉はBC 2 C~BC 4 Cまで, 〈骨型〉は2~3 Cのガンダーラに, 〈開鈷式〉〈鉄亜鈴または独鈷杵型〉〈閉鈷式〉は2 C以後仏教, ヒンドゥ教, ジャイナ教寺院に見られる。

〈骨型〉で最初のヴァジュラは, ガンダーラのインドラのものである。仏伝図「アパララ龍王の帰依」の場面で, 洪水を起こす龍王をブッダが従者ヴァジュラパニに命じヴァジュラで山腹を叩かせ, 龍王に説法し帰依させ, 洪水を鎮めたという説話がある。インドラが悪龍を退治した伝説が, 仏教的に転換したものと思われる。〈骨型〉はアフガニスタン, ハッダの寺院でも見られ, ギリシャ神話のヘラクレスのヴァジュラパニ像がある。また新疆ウイグル自治区のクチャのキジル千仏洞のヴァジュラパニは, 装飾的な〈骨型〉を持っている。この形が手柄に似ているため, 「跋折羅」の漢訳は「金剛杵」つまり金剛石の杵となったと思われる。

故梅尾祥雲先生は「金剛薩埵の前身としての金剛手の研究」で, 金剛手 (ヴァジュラパニ) が経典中どう金剛薩埵菩薩に変遷したかを示している。そこでヴァジュラは外敵に対する武器から, 金剛石のように不壊の心で, 煩惱 (心中の敵) を打ち砕く武器になった。

また鈷には古代の護身用武器の意味がある

が、インド考古局の報告ではヴァジュラに似た出土品はないとされている。漢字の鈷は「金偏」と「古（いにしえ）」から成っており、「古」は「口」の部分（サイ）と「十」は楯（タテ）から、「サイ」は神に捧げる祝の言葉を入れる器で、「タテ」は器を蓋し護る神聖な意味がある。よって鈷は古代の武器というより呪器の意味合いを含むと私は考える。その鈷を持つヴァジュラは〈開鈷式〉〈鉄垂鈴型または独鈷杵〉〈閉鈷式〉で、2C~16Cにかけて見られ、5C以降〈閉鈷式〉の作例が多くなっている。

日本には8Cの雑密の金剛杵と鏡（金剛鈴の古形）があり、後のものと異なる形態であり、その伝来は不祥である。これをインド北部のヴァジュラの形と照合すると、鏡の鈷はインド北西部のヒンドゥ教寺院にあるインドラ像の形態によく似ていることがわかった。

阪田宗彦著『密教法具』では金剛杵を構成する部分を以下に名付けている。鈷の部分を1) 中鈷と2) 脇鈷、握りの装飾の部分を3) 鬼目と4) 連弁飾り5) 紐または三線とし、さらに鈷の根元に龍口（龍の口）、獅子噛み、鬼面をほどこしたものもある。

鬼目には、僻邪や修行をさまたげる煩惱を退ける願いが込められている。連弁飾りは、蓮が泥中でも清らかな花を咲かせる様子から蓮華化生の信仰が生まれ、蓮上に聖なるものが現われることを象徴する。獅子噛みから鈷が伸び出しているのは、杉浦康平著『日本のかたち、アジアのカタチ』に、この獣面は「彼らの口はむしろ腕を吐き、胴を生み出そうとして開かれているのではないだろうか。力あるものの（吐出）こそ、獣面の聖獣たちが果たすべきもう一つの重要な役割ではないのだろうか。」とあり、獅子噛みは武器の威力が増すようにとの願いが込められた装飾である。

インドのヴァジュラには柄の形態にも数種

の類型があり、1) 紐で中央を束ねたもの、2) 球形のもの、3) 柄が長いもの、4) 柄が短いもの、5) 中央がくびれただけのものである。日本の鬼目、連弁、獅子噛みはないが、鈷の根元を束ねる紐や数珠の装飾がある。チベットのものは柄に球と連弁があり、鈷は植物やマカラ魚の口から吐出される渦の形のものもある。インドネシアの仏教遺跡から10~16Cの〈開鈷式〉と9Cの〈閉鈷式〉のものが出土した。中央の球に鬼目があり、〈開鈷式〉の根元は赤蓮華の形を、〈閉鈷式〉は青蓮華の形をしている。鈷の根元には獣面が刻まれている。このように時代と地域により様々な様式の差異がみられると同時に、共通してみられるのは鈷が天地両方についていることである。

チベット、ラサにあるポカラ宮殿の秘密集会立体マンダラの基壇部分には、クロスヴァジュラ（羯磨金剛杵）が配されている。これは地下世界からの魔力を排除し、聖なる楼閣が顕われる場を結界する役割をしている。この考え方は絵画のマンダラにもあり、四門上のマカラアーチは、真上から見たクロスヴァジュラの鈷である。日本の胎蔵界曼荼羅の中台八葉院には連弁の間に金剛杵の鈷が見える。仏が顕現する聖なる場の下に巨大なヴァジュラが観想され、魔的な力を浄めるという考えがこの図像の中に反映されているのである。

ヴァジュラが実用の武器であるかどうかはさておき、両方に鈷の切先がついた形状は、宗教学者M.エリアーデの「古代人の宇宙観」を想起させる。古代人の心性に三界をつらぬく宇宙の中心軸があることを、その宇宙軸は様々なところに現れることを柱立ての儀礼、生命の樹のシンボリズム、仏塔の心柱などに見出した。私は稲妻を象り、切先を天と地の両方に伸ばしたヴァジュラの形態にも宇宙軸が見出せると考える。